

受験番号

2023年度

神戸国際中学校 A－I 選考

国 語

(2023 年 1 月 14 日実施、50 分、100 点満点)

(注意)

- 1 解答用紙と問題冊子の両方に、必ず受験番号を記入してください。
- 2 全ての問題に解答してください。
- 3 解答は全て解答用紙に記入してください。記入方法を誤ると得点にはならないので、十分に注意してください。
- 4 試験終了後、解答用紙と問題冊子の両方を提出してください。

【一】次の文を読んで、後の問いに答えなさい。解答に字数の指定のある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。（本文に一部表記を改めたところがあります。）

子どもから大人になるa**プロセス**にある十代は、その人が他者とコミュニケーションを取り交わす作法を学び取る大切な時期です。私たちは他者である相手と言葉を交わすことによって、①情報内容の伝達だけではなく、思いや感情といった**※情緒**的側面の交感をも重ねます。そうしたコミュニケーションの過程のなかで、自分から相手を②**まなざす**と同時に、相手から自分に向けられるまなざしを受け止めながら、〈いま・ここ〉の自分のあり方を振り返り、とらえ直す作法を学び取ります。

（A）これから検討していく言葉群、私が「コミュニケーション**※障害**語」と名づけた二連の言葉は、そうした自分と相手の双方向のまなざしが自分自身のなかで交差することを、著しく**障害**する危険性があると思うのです。自分から相手を一方的にまなざすばかりで、相手からのまなざしを回避してしまう道具としての性格を、こうした言葉はいつのまにか帯びてしまっているというのが、私の考えです。〔中略〕

障害語の代表的なものが、③「ムカつく」と「うざい」という二つの言葉です。

この言葉は、このところ若者を中心にあつという間に定着してしまった感のある言葉です。「ムカつく」とか「うざい」というのはどういう言葉かというと、自分の中に少しでも不快感が生じたときに、そうした感情をすぐに言語化できる、非常に便利な言語的**もツール**なのです。

（B）、自分にとって少しでも異質だと感じたり、これは苦い感じだなと思ったときに、すぐさま「おれは不快だ」と表現して、異質なものと折り合おうとする意欲を即座に**※遮断**してしまう言葉です。しかもそれは他者に対しての攻撃の言葉としても使えます。「おれはこいつが気に入らない、嫌いだ」ということを根拠もなく感情のままに言えるということです。ふつうは、「嫌いだ」と言うときには、「こういう理由で」という根拠を添えなければなりません。が、「うざい」の一言で済んでしまうわけです。自分にとって異質なものに対して**※端的**な拒否をすぐ表明できる、安易で便利な言語的ツールなわけですね。

（C）④人とのつながりを少しずつ丁寧**に築**こうと思ったとき、これらの言葉はなおさら非常に問題を**※孕**んだ言葉になるのです。

どんなに身近にいても、他者との関係というものはいつも百パーセントうまくいくものではありません。関係を構築していく中で、常にいろいろな阻害要因が発生します。他者は自分とは異質なもののですから、当然です。じっくり話せば理解し合えたとしても、すぐには気持ち伝わらないということもあります。そうした他者との関係の中にある異質性を、ちよつと我慢して自分の中になじませる努力を最初から放棄しているわけです。

つまり「うざい」とか「ムカつく」と口に出したとたんに、これまで私が幸福を築くうえで大切だと述べてきた、異質性を受け入れた形での親密性、親しさの形成、親しさを作り上げていくという可能性は、ほとんど根こそぎゼロになってしまうのです。これではコミュニケーション能力が高まっ

ていくはずがありません。

もつとも、流行語になるずっと以前から、「むかつく」とか、「うざった

い」という言葉はありました。でも⑤あまり日常語として※頻繁に現れるということはありませんでした。なぜかといえば、現在の状況のように、すぐに「ムカツク」とか「うぜー」と表現することを許すような、場の雰囲気というものがなかったのです。でも今はあります。

「ムカツク」「うざい」が頻繁に使われる以前はどうしていたのでしょうか。私たちの世代でも今の若い人たちと同じように、ムカついたり、うざいという感情を持つことはあったはずですが、でもそれを社会的に表現するには、それだけの理由、相手に対するそういう拒絶を表現してもいいのだという根拠を与える理由がないと言えないという雰囲気があったわけではあります。

それが今は、主観的な心情を簡単に※発露できってしまうほど、社会のルール性がゆるくなってしまったのだと思います。昔は、そんな言葉はきちんとした正当性がない限り、言うてはいけないという暗黙の了解がありました。だから、いくらムカついてもグツと言葉を飲み込んでおくことによって、ある種の耐性がうまく作られていったと思うのです。

（管野 仁 『友だち幻想』）

※情緒…喜怒哀楽を生む心の動き。

※阻害…じゃますること。

※遮断…流れなどをさえぎって、とめること。

※端的…はっきりとしているさま

※孕む…内部にふくみ持つ。

※頻繁…たびたび繰り返し返されること。

※発露…心のことがらが行動・態度・表情などにあらわれること。

問1 (A)・(B)・(C)に入る語を次のア～エから選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア しかも イ しかし ウ だから エ つまり

問2 Ⅱ a・bのカタカナ語と同じ意味の熟語を本文中から漢字二字でそれぞれ抜き出しなさい。

問3 Ⅰ①「情報内容の伝達」とありますが、これの具体的発言の例として、ふさわしくないものをア～エから二つ選び、記号で答えなさい。

ア 明日十時に結果発表となります。

イ 風が冷たくなるから気をつけましょう。

ウ 黄色い服は白黒の服装のアクセントに使いましょう。

エ あなたがいなくなるとさびしいです。ありがとう、元気でね。

問4 Ⅰ②「まなざす」とありますが、この言葉の言いかえとして最も適当なものをア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 見上げる イ とらえる

ウ 共感する エ 否定する

問5 ―③『ムカツク』と『うざい』という二つの言葉とあります

が、これらの言葉のはたらきとはどのようなことですか。六十字以内で答えなさい。

問6 ―④「人とのつながりを少しずつ丁寧に築こうと思ったとき、」とあ

りますが、人とのつながりを少しずつ築くために必要なものを、本文中から四十字以内で探し、最初と最後の五字を抜き出さない。

問7 ―⑤「あまり日常語として頻繁に現れるということはありませんでし

た」とありますが、以前はどうして「頻繁に現れ」なかったのですか。次の文の空欄に入る語句を十字以内で抜き出さない。

() がないと言えないという場の雰囲気があったから。

問8 本文の内容と合致するものをア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 十代でコミュニケーションを学ぶうえで大切なのは、情報内容の伝達ではなく、異質な者に思いや感情をうまく伝えることである。

イ コミュニケーションにおいては、一方的に相手を見つめることではなく、相手からの視線を受け止める訓練をしていくことが重要である。

ウ 人とのつながりを丁寧に築こうとしたとき、異質な者を受け入れるための邪魔となるのは、親密になろうとする努力である。

エ 以前は社会的に相手への拒絶を表すような語を使う場合、必ず相手の異質さへの歩み寄りの気持ちを持つべきという暗黙の了解があった。

□ 次の本文を読んで、後の問いに答えなさい。解答に字数の指定のある場合は、句読点やかっこなどの記号も字数として数えます。(本文に一部表記を改めたところがあります。)

社会見学の翌日、登校したみなみは、教室の戸を開けるや、(A)を見張った。学がいたからだ。

「あ」

学の机に手をつけていた憲太がすぐに気づいて、声を発した。

「おはよう、手塚さん」

戸からすぐのところに棒立ちになってしまったみなみに、学は振り返って

(B) 挨拶してきた。

すでに教室にいた亮介も、その声でみなみに視線を送ってくる。

「なんでそんなに①びっくりしてるの？」

笑顔なのに学の心は違つと、みなみは敏感に悟る。でもそれは、みなみでなくともわかるのだらう、学級活動のために一年の教室に來た弥生も、さまざまの成り行きを見守る表情になった。

「昨日は、もともと法事で欠席する予定だったんだ。予言どおりに死んでなくて、残念？」

学はみなみの本音を（C）暴いてみせた。「手塚さんは僕の命なんかより、自分に特別な力があると証明したかったようだし」

「……え、でも……」

みなみはしどろもどろになった。「でも……本当に夢で」

「正夢くらい、誰だって一年のうちに何度か見るよ。それ、普通だよ」

学は椅子から立ち上がった。細身なのに、学からは威圧感がほとばしり出ていた。その威圧感は、次に怒りと軽蔑に変わった。

「手塚さん、もし僕から、手塚さんは近いうちに死ぬよ、僕には超能力があるからわかるんだ、なんて言われたら、楽しい？」

磨かれたレンズの横のフレームを右手でくつと上げたと同時に、学は嘘臭い微笑みをあつさり手放して、みなみを冷たく睥睨した。

「僕は、とても不愉快だった」

どこの世界に、自分が夢を見たからおまえは死ぬなんて断言されて、嬉しがる人がいるの？——学は※容赦なかった——②君は自分のために予言したんだ。自分の満足のために。

「特別な存在になりたいくて。自分のアイデンティティを確立したくて。違う？」

「あ、あい……なに？」

学の口からこぼれた知らない単語をみなみは訊き返したけれど、学は教えてはくれなかった。そんなこともわからないのかと言わんばかりに、さらに目つきに※侮蔑を混じらせただけだった。

「手塚さん、最近急に予言とか霊能力とか言うようになったよね。小学校のころはそうじゃなかったのに。昨日もトンネル跡でひと騒動おこしたんだっただね。憲太から聞いたよ」学は再び椅子に腰かけ、右手でシャープペンシルを躍らせ始めた。

「うちのお母さんが言っていた。君みたいな『自称・わたしには霊感があるの』っていう女の子、お母さんの中学時代にもいたって」

学は続ける。「お母さんが言うには、そういう子って、きれいでも可愛くもない、勉強もあまりできない、これだけは誰にも負けないっていうものがないくせに、自意識だけは過剰な子が多かったって。幽霊って、他人には見えないことが前提で、答え合わせの必要がないからね。言ったもの勝ちなんだ。なにもできないけど事実を認めたくない、勘違い気味の子が使いたがるのもわかるよ。手塚さんもそうなのかな？」

弥生がため息をつき、いつもの一番端の席に座る。みなみは混乱の極みにいた。ものすごく馬鹿にされている気がする。でも、反面で③学の言葉はあまりに痛い。心のもつともかなめの部分に当たっているからだ。

「大人になったら、いつの間にかそんな子はいなくなっちゃって、お母さん笑ってた」

「でもわたしは、本当に江崎くんが授業で当てられるのを……」

「一年生は四人しかいないんだよ。当てられるのなんて珍しくもなんともないよ。みんななにかにかで、毎日当てられている」

「本の、霊能力チェックで……」

「あれ、ちらつと見たけど、僕もほとんど当てはまったよ。冬に静電気ではちばちするのなんて普通だし、肩揉みをしたら、たいがい喜ばれるよ」

みなみは自分が崖の上に※佇む風景を見た。④その崖が学の一言一言で崩れ、どんどん立っていられるスペースが小さくなっていく。

「本当に……見たことがあるの。おじいちゃんの幽霊と、昨日だった……。※オーラは金色で……。予知夢も……」

「ああ、手塚さん、一年後の僕たちを予知してたね。四人は四人でかわらず教室にいる、って」

学は横の憲太を見上げた。「憲太、教えてやりなよ」

「あのさあ、手塚さん。俺のじいちゃんはやってたんだけど」

憲太は気まずそうに耳の後ろを掻いた。「この分校、来年度からは本校と統合されるんだよ、四人で授業を受けるのは、今年が最後だよ。えっと、知らなかった？」

憲太の祖父は村長だ。みなみは初耳の情報に手から力が抜けた。

「残念だったね、これも外れだ」

どさり、という音がした。⑤みなみの鞆が床に落ちた。

「わたしは……小さいころから、電話や人が来るのがわかったり……勘がいいってお父さんやお母さんから……」

「手塚さんは今まで目が見えたり耳が聞こえるのを、だれかに自慢したことはある？」

「えっ？」

みなみには、学が急に話を変えたとは思えなかった。しかし違った。学はあくまでみなみを追い詰めて続いていた。

「世の中には体の不自由な人がいるけれど、ありがたいことに僕はそうじゃない。手塚さんも同じだ。僕らにとってはなにかを見て聞くのは普通にでき

る。物心ついたころから当たり前のこととして受け止めているよね。僕の言うこと、わかる？」

とりあえず、みなみは頷いた。

「もし、最初から日常的に物事の先がわかったり、幽霊が見えたりしていたら、それだって手塚さんにとっては※五感と同じに、当たり前のはずだよ。僕なら逆に、どうして自分では周りの周りはできないのか、とても戸惑うと思うよ。特別だと※アピールするなんて、考えもつかないだろうな。だって、自分にとっては特別じゃないんだから」

学の指の間でダンスしていたシャープペンシルが、握られて止まる。

「僕、手塚さんが急に霊能力がどうこう言い出したとき、どこか自慢げだなって感じた。自慢するのは手塚さんもそれが『特別』だと思っているからだ。普通だらけの中にたまたま出てきた、※イレギュラーな、当たり前じゃない出来事だからだ。つまり、君には霊能力なんてないんだ。手塚さんはとりたてて取り柄のない、ただの人なんだよ」

みなみの手足は冷たく、反対に顔は熱かった。頬のにきびが痛い。そののにきびの上を、涙が流れ落ちていく。みなみは涙をすすった。

（乾 ルカ 『願いながら、祈りながら』）

※睥睨……周囲をにらみすえて威圧すること。

※容赦……てかげんすること。

※侮蔑……相手を見下してばかにすること。軽蔑。

※佇む……ある場所にしばらく立ち止まる。

※オーラ……人や物から発散される霊気。

※五感…外界の事物を認識する五つの感覚。

※アピール…人々の関心をひきつけること。

※イレギュラー…不規則であるさま。変則的。

問1 (A)に入る体の一部を表す語を漢字一字で答えなさい。

問2 (B)・(C)に入る語をそれぞれの語群から選び、記号で答えなさい。

B

ア こここそと イ につこりと ウ いらいらと

エ びくびくと

C

ア なみなみと イ こんこんと ウ やすやすと

エ めきめきと

問3 ①「びっくりしている」といいますが、どうしてみなみはびっくりしたと「学」は考えたのですか。次の文の空欄に入る語句を十字以内で答えなさい。

みなみが事故で死ぬと予言した () から。

問4 ②「君は自分のために予言したんだ」とありますが、これはどうすることのために予言したということですか。三十字以内で説明しなさい。

問5 ③「学の言葉はあまりに痛い」とありますが、これはどういう気持ちですか。その説明として最も適切なものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア きれいでも可愛くもなく、勉強もできないと言われ、自尊心を傷つけられたという気持ち。

イ 自分の言動のすべてが学に馬鹿にされている気がしていたたまれないという気持ち。

ウ 予言が出来る人などこの世にはいないと言われて信じるものがなくなってしまうてきびしい気持ち。

エ 学の言葉がすべて心の中で正しいように感じられ、逃げ場がなくなつて苦しいという気持ち。

問6 ④「その崖が学の一言一言で崩れ、どんどん立っていられるスペースが 小さくなっていく」について、

(i)ここに用いられている表現技法の種類を次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 体言止め イ 擬人法 ウ 隠喩 エ 直喩

(ii)「崖」が「崩れ」て「立っていられるスペースが小さくなっていく」気持ちを説明した一文の空欄に入る言葉を本文から四字で抜き出しなさい。

みなみは、学の言葉に（ ）られていった。

問7 ―⑤「みなみの鞆が床に落ちた」のはなぜですか。三十字以内で説明しなさい。

問8 この本文の表現上の特徴の説明として、ふさわしくないものをア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 学のシャープペンシルを回したり止めたりする動作が学の話の仕方、切り出し方を目立たせている。

イ 学の言葉と周りの級友たちの反応をおりまぜながら、みなみの心理をきわだつように描いている。

ウ 学の視点からみなみの視点へと移動しながら二人の心理の移り変わりをくわしく描いている。

エ みなみの身体的反応を描くことで、みなみの心理の移り変わりを効果的に描き出している。

三 次の文のカタカナの語を漢字で答えなさい。

- ① 食事をセツヤクしている。
- ② 重要書類をホカンする。
- ③ 予防チユウシヤをうつ。
- ④ 国民にはノウゼイの義務がある。

- ⑤ ワインをチヨゾウしている。
- ⑥ 両国間のリヨウド問題。

四 次の文の一部の中には、言葉づかいが適切でないものが四つあります。それらの記号をあげ、その部分を正しく書き直しなさい。

① パーティーにはアお父さんがイウかがいます。

② 私はウ母の心のこもった食事を感謝の気持ちでエめしあがりました。

③ 昨日、先生がわたしの家へオいらつしやいました。

④ みなさま、ただいまカ拝見なさいましたが、ゴッホのひまわりでキさいます。

⑤ 先生のク申されましたことを、いつまでも心にとどめてクがんばっています。くつもりでクさいます。